「ずして」の意味

——主として平安和文の用例を通しての分析——

関　一　雄

要　旨

「ずして」と「で」の相違は一般に、「漢文訓読語」対「和文語」という位相差として捉えられている。

しかし、その用法を微細に見ると、「ずして」は〔〜シナイママデ（〜シナイ状態デ）〕の意を表し、「で」の〔〜セズ（〜シナクテ）〕とは明らかに相違する。前者は、「ず＋して」と分析される否定順態接続の状態表現であり、後者は、接続助詞「て」の対義になる否定単純接続表現で、文脈に依存して稀には否定逆態接続表現の用例も見出される。これは、「形容詞語尾＋して」の「くして」「しくして」対「形容詞語尾＋て」の「くて」「しくて」、及び形容動詞語尾「に」に「して」「て」の下接した、「にして」対「にて」の対立においても同様に説明できる。

『うつほ物語』『源氏物語』等の作り物語で、「ずして」が主に会話文に用いられたのは、その固定的・限定的な意味が、会話主体の聞き手に対する正確な伝達にとって有効であったからである。

「ずして」が漢文訓読（訓点）に多く用いられたのも、それが漢文（中国語文）を日本語に訳すに当たって、より正確であることが期せられる読解の次元では適していたからであろう。

一方、和文（文学作品）における「で」は、表現主体（作者）の用語選択（言葉選び）の中で、「ず」「ずして」との意味差を意識して使われたもので、表現の次元での用語として捉えられるべきものである。

鎌倉時代のいわゆる和漢混淆文では、「ずして」と「で」が、地の文・会話文の区別はなくて、もっぱら意味差に基づいて使い分けられているのは、鎌倉時代の作者による主体的な用語選択を示すものであり、平安時代の作者とその基準こそ違え、本質としては同じと考えられる。

0　通行の辞書の解説の問題点

二〇〇一年に「ずして」について三つの辞書の解説が出そろった。

A「（略）中古、「ずして」は主として漢文訓読系の文中に用いられ、仮名文学作品においては、和歌や男性の会話文などを除いてはほとんどみられず、これに代わって「で」または中止法の「ず」が用いられている。」（『日本国語大辞典第二版』の語誌

の欄）

B「（略）（「ずして」は）平安時代に入ると、主として漢文訓読系の文章の中に見られるようになる。和文では、「ずして」にかわって接続助詞「で」や連用中止法での「ず」が多く使われ、「ずして」は和歌や男性の会話文中などに限られるようである。」（『日本語文法大辞典』の語誌の欄）

C「（略）「さへに」「かなや」のような複合助詞形も訓点にのみ存在するものである。逆にほとんど存在しない助詞としては逆接の「ど」（訓点では「ども」）、否定接続の「で」（訓点では「ずして」）、係助詞の「なむ」（「なも」）などがある。（略）」（傍線は、関）

（『訓点語辞典』〈二〇〇一年〉の訓点語概説中の【和文語と訓点語の文法面での相違】の一節）

この三つの解説には共通の問題点がある。それは、「ずして」と「で」を同意としていることである。AとBには両者の意味記述も見られるので、そこを参照して対比してみると、右のように言える。Cも引用の記述からしては、同意であることを前提になされていると見て、よさそうである。

次に、AとBの記述は果たして事実に即しているのかについて疑義がある。かりに事実を述べているとしても、何故こうなのか、についての説明はない。説明の無い単なる記載は、ほとんど意味を持たない。

さて、二つの異なる語形が同意であるか否かの検討は、同一の資料・作品中でなされて始めて確かなものとなるはずである。本稿ではこの考え方から、一つ一つの資料ごとに「ずして」と「で」との意味差の有無を検討する。但し、同一の資料に片方しか見いだせない場合は、関連する語形のペアを採り上げて、それからのアプローチを試みる。

【①の類の番号の用例は「ずして」のもの（太傍線を付す）、iの類の番号それは「で」（波傍線を付す）、その他はそれぞれ異なる類の番号と傍線で区別する。】

1『古今和歌集仮名序』の「ずして」―「～にして」と「～にて」、「～くして」と「～くて」の相違を通して―

『仮名序』には、周知のごとく古注と呼ばれるものが割注で記されている本が多く、その文中には「で」も散見されるが、古注は後人の書き込んだものとする説が有力であり、同一資料として扱うのはここでは問題があるので、考察の外においた。そうすると、「で」の用例は無いので、関連する語形（サブタイトル中にも示したもの）の例から検討していく。

(1)ちはやぶる神世には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、事の心わきがたかりかりけらし。

(2)春の花にほひ、すくなくして、むなしき名のみ、秋のよのながきをかこてれば、

【春ノ花ノ美シサハ、殆ドナクシテ、実質ノ無イ評判ノミ、秋ノ夜ノ長イノヲ嘆イテイルノデ、】

(3)宇治山の僧きせんは、ことばかすかにして、はじめをはり、たしかならず。

【宇治山ノ僧喜撰ハ、言葉ガ不明瞭デアッテ、首尾ガ一貫シナイ。】

1ふんやのやすひでは、ことばたくみにて、そのさま身におはず。

【文屋康秀ハ、言葉ハ巧ミダガ、ソノ姿ガ作者ノ品格ニ合ワナイ。】

2ありはらのなりはらは、その心あまりて、ことばたらず。しぼめる花の、色なくて、にほひのこれるがごとし。

【在原業平ハ、ソノ情感ハ溢レテイルガ、表現ガ未熟ダ。萎ンダ花ガ、色ハ褪セテイルガ、匂イガ残ッテイルヨウナモノダ。】

(1)(2)(3)のような「～にして」「～くして」は、一部に現代語訳も試みてみたように、順態接続表現に用いられている。しかも、(3)の訳〔デアッテ〕が示すごとく状態の意が加わる。これは「して」の表すものである。(2)の訳に示したように現代語にも〔ナクシテ〕が生きている。

これに対し、1 2の「～にて」「～くて」は、逆態接続表現に用いられている。

「ずして」は、二例のうち、一つが次のものである。

①あをやぎのいとたえず、まつのはの、ちりうせず して、まさきのかづら、ながくつたはり、とりのあと、ひさしくとゞまれらば、うたのさまをしり、ことの心をえたらむ人は、おほぞらの月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、いまをこひざらめかも。

この例は「……ず、……ず＋して」の用法を採るもので、先行の二つの否定表現を「して」が受けとめて状態表現を加えているものと考えられる。それは、後続句「ながくつたはり」「ひさしくとゞまれらば」の存続的表現（「ら（り）」の使用）と呼応していると見做される。

2『土左日記』の「ずして」―「で」との相違、「なくて」と「なくして」の相違と関連させて―

(1)かぜなみやまねば、なほおなじところにとまれり。たゞうみになみなくして、いつしかみさきといふところわたらんとのみなんおもふ。（一月一六日）

【風モ波モ止マナイノデ、ヤハリ同ジ所ニ停泊シテイル。タダ、海ニ波ガ無クナッテ（無イ状態デ）、早ク御埼トイウ所ヲ通リ過ギタイトバカリ思ウ。】

1かゝるあひだに、ひとのいへの、いけとなあるところより、こひはなくて、ふなよりはじめて、かはのもうみのも、こともどもの、ながびつにになひつゞけておこせたり。（一月七日）

【コウシテイルウチニ、アル人ノ家デ、「池」トイウ名ノアル所カラ、鯉ハ無イガ、鮒ヲハジメトシテ、川ノ魚モ海ノ魚モ、ソノ他の食物モ長櫃デ次々トカツギ入レテヨコシテクレタ。】

(1)1の「～くして」「～くて」の意味差は『古今仮名序』の例と全くおなじである。

「ずして」は、

①おもしろしとみるにたへずして、ふなびとのよめるうた、（一月九日）

②かくあるをみつゝこぎゆくまに〳〵やまもうみもみなくれ、よふけて、にしひがしもみえずして、てけのこと、かぢとりのこゝろにまかせつ。（一月九日）

のように、「耐ふ」「見ゆ」の二つの動詞に下接しており、殊に「耐

ふ」の例は①の他に5例も用いられることが注目される。この点については後述する。

「で」は、

i かぢとりもののあはれもしらで、おのれしさけをくらひつれば、はやくいなんとて、（一二月二七日）

ii このかうやうにものもてくるひとに、なほしもえあらで、いさゝけわざせさす。（一月四日）

iii とまりにいたりて、おきなびとひとり、たうめひとり、あるがなかにこゝちあしみして、ものものしたばで、ひそまりぬ。（一月九日）

iv ふねもいださでいたづらなれば、あるひとのよめる、（一月一八日）

v かくたいまつれども、もはらかぜやまで、いやふきに、いやたちに、かぜなみのあやふければ、（二月五日）

のように、「知る」「あり」「賜ぶ」「出だす」「止む」の五つの動詞に下接しているが、殊に「あり」には、iiの他に二例用いられていることが注目される。これについても後述する。

3 『竹取物語』と『うつほ物語』の「ずして」―主に、会話文に用例の見られる理由―

『竹取物語』の例は次の一例である。

①竹取の翁はしり入りていはく、「（略）なにをもちてかとかく申すべき。旅の御姿ながら、わが御家にも寄り給はずしておはしたり。はやこの皇子にあひ仕ふまつり給へ」と言ふに、（かぐや姫八）物も言はで、つらづゑをつきて、いみじうなげかしげに思ひたり。（蓬莱の玉の枝）

この例で注目されるのは、竹取翁の会話に続く地の文では、「で」が用いられていることである。

『うつほ物語』では、次の一〇例である。

②（俊蔭）「（略）昔、宣旨に適ひて、度々の試みを賜はりて、唐土に渡されぬ。父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありと言へども、学び仕うまつる勇みはなし。（略）」（俊蔭）

③（一条北の方）「（略）価問はれば、『千五百』といらへよ。せめて問はるるものならば、人に聞かせずして、おとどに、『（略）』と言へ」（忠こそ）**【女性の会話文例】**

④（正頼→妻大宮）「（略）かねてより、『一つのことも欠かずして、ただ、年の返らば、候はせ奉らむ』とこそ思ひしか。（略）」（嵯峨の院）

【「前々カラ、『一ツノコトモ手ヲ抜カナイヨウニシテイテ、タダ、年ガ改マッタナラバ、参上サセヨウ』ト思ッテイマシタ。**】**

⑤（左衛門督ノ歌）我頼む千歳の陰は漏らずして松風のみぞ涼しからなむ（祭の使）

⑥かくて、御神楽に出で立ち給ふ。（略）御車二十ばかり、四位・五位数知らずして、桂川に出で給ふ。（祭の使）**【地の文例】**

【コウシテ、御神楽ヲ催スタメニ（桂殿ニ）出立ナサル。（略）御車ハ二十両ホド、四位・五位ノ者タチガ数ガ分カラナイ状態デ（ナイホドオ供ヲシテ）、桂川ニオ着キニナル。**】**

⑦（博士達）「季英、まことに悟り侍る者なり。されど、しが魂定まらずして、朝廷に仕うまつるべくもあらず。（略）」（祭の使）

⑧（山臥〈忠こそ〉→朱雀院）「（略）『親を害する罪よりもまさる罪や侍ら

「ずして」の意味 ――主として平安和文の用例を通しての分析――

む』と、魂静まらずして、すみやかにまかり籠りて、（略）年ごろになり侍りぬ」（吹上　下）

【「『親ノ機嫌ヲ損ネル罪ヨリモ重イ罪ハゴザイマセン』ト存ジ、心ノ静マラナイママニ、タメラワズ直チニ、（鞍馬ニ）引キコモリマシテ、（略）モウ何年ニモナリマシタ」】

⑨（致仕大臣）「我、昔より、食ふべき物も食はず、着るべき物も着ずして、天の下、そしられを取り、世界に名を施して、財を蓄へしことは、死ぬべき命なれど、（略）」（あて宮）

⑩（大将（仲忠）→嵯峨の院）「思ひかしこまりて承りぬ。しばしば候ひぬべきを、公私と、え避らぬことどもに明け暮らし、暇候はずしてなむ。宮の御ことは、なにがしが取り申しつることにも侍らず。（略）」（楼の上　上）

⑪（嵯峨の院消息）「（略）故治部卿の朝臣、公人として侍りし跡だに。身を朝廷に従へて、唐土の使にまうで、仇の風に会ひて、多くの年、父母の顔もあひ見ずして、悲しき目を見て、（略）」（楼の上　下）

『うつほ物語』では、一〇例のうち八例が会話文の例で、多くは男性のものであるが、③の一例は、女性のもので、男性の会話語とは断定できない。また、「ずして」の意味は、④⑥⑧に示したように〔ナイママニ（ナイ状態デ）〕と解され、『古今仮名序』『土左日記』と共通する。また、⑪の例は、②を受けて俊蔭のことを述べている。②では「長く別れて」の前に「あひ見ずして」が使われているのに対して、この例では反対に、「多くの年」が先に出て、「あひ見ずして」が続く。いずれにしても、「ずして」が〔ナイママニ〕という状態の継続（無変化）を表すものである。

この二つの物語の作者は、「で」の文脈に依存して順接にも逆接にもなり得るものとは対蹠的な、如上のような限定的意味の「ずして」を主に会話文に用いることにより、会話語として聞き手への伝達の的確さを際立たせたのである。

4 『源氏物語』の「ずして」―『蜻蛉日記』の一例にもかかわって―

①（博士）「かくばかりの、しるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたぶ。はなはだをこなり」（源氏物語・乙女）

②（常陸介）「この頃の御徳などの心もとなからん事は、なのたまひそ。なにがし、いたゞきにも捧げたてまつりてむ。心もとなく、「何を飽かぬ」とか思すべき。たとひ、敢へずして、仕うまつりさしつとも、残りの宝もの、領じ侍る所〳〵、一つにても、又、取り争ふべき人なし。（略）」（源氏物語・東屋）

③（源氏→大宮）「さるは、かの知り給ふべき人をなむ、思ひまがふること侍りて、不意にたづねとりて侍るを。その折は、「さるひがわざ」とも、あかし侍らずありしかば、あながちに、ことの心を尋ねかへさむ事も侍らで、たゞさるもの、くさの少なきを、「かごとにても、何かはと、思うたまへ許して、をさ〳〵睦びも見侍らずして、年月はべりつるを。（略）」（源氏物語・行幸）

【「実ハ、アノ内大臣（以前の頭中将）ガオ世話ナサルハズノ人（玉

鬘）を、思イ違イを致シタ事情ガゴザイマシテ、偶然ニモ引キ取ッテオリマスケレド。ソノ当座ハ、当人（玉鬘）タチハ、「間違ッテイル」トモ、ハッキリサセテクレマセンママデアリマシタノデ、強イテ、事情ヲ詮議ダテスルコトモゴザイマセンデ、タダ子供ノ少ナイ物足リナサカラ、「コレガ口実デアッテモカマウコトハナイ」ト、自分ヲ納得サセマシテ、ホトンド親身ニナッテ世話ヲ致サナイママニ、年月ガ過ギテシマイマシタガ。】

○さて、年ごろ、思へば、などにかあらん、ついたちの日は、見えずしてやむよなかりき、さもやとおもふこゝろづかひせらる。（蜻蛉日記・天禄二年一月）

【サテ、何年モノ間、思エバ、ドウシタワケダロウ、元日ハ、顔ヲ見セナイママニ終ワッテシマウ時ハナカッタ。今日モ来テクレルカト心遣イサレル。】

右の用例のうちで、長く引用した③の「ずあり」「で」「ずして」の三つは、意味に微妙な相違が認められる。「ずあり」と「ずして」の意味は酷似しており、ほぼ同意としてもよかろう。「ずあり」は、過去表現の助動詞「き（しか）」が下接するために、この言い方となり、「ずして」は現在表現であるという相違がある。ラ変の「あり」とサ変の「す」の意味は基本的に相違するが、このような用法では、状態性の表現として共通するところがある。

①の博士、②の常陸介の会話の「ずして」も〔ナイママニ〕の意に採れば文意に適うのではないか。この二人の人物が共通して漢文訓読に通暁していたとは考えるのは如何にも不自然である。更に注目すべきは、『蜻蛉日記』には、前掲のような「ずして」が一例地の文に用いられることである。作者がここで、「見えずして」を用いたのは、「見えで」〔顔ヲ見セナイデ〕の表現では作者の思いを読者に的確には伝達し難いと考えたからであろう。前節の『竹取物語』『うつほ物語』、さらには右の『源氏物語』の会話語に使われた「ずして」と同一の用法と捉えるべきものである。

5 『うつほ物語』『源氏物語』の「ずなどして」―『源氏物語』で「ずして」が地の文では用いられなかった理由―

①′この娘、かくめでたう、春宮にも、「参らせよ」などのたまはすれど、え宮仕へなどにも出ださずなどしてありけるに、（うつほ物語・嵯峨の院）

②′君は、をとこ君のおはせずなどして、さうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひ聞え給ひて、うちなきなどし給へど、宮をば、ことに思ひ出で聞え給はず。（源氏物語・若紫）

③′司召の頃、この宮の人は、給はるべき官も得ず、大方の道理にても、かならずあるべき加階などをだに、せずなどして、嘆く類多かり。（源氏物語・賢木）

④′（明石上ハ源氏ガ）すぎたりとおぼすばかりのことは、しいでず。又、いたく卑下せずなどして、御心おきてに、もて違ふ事なくて、いとめやすくぞありける。（源氏物語・薄雲）

『うつほ物語』には、「ずして」が地の文に一例ではあるが用いられているものの、『源氏物語』には全く用いられないのは、右に挙げたように、「ずして」に意味の極めて近い「ずなどして」が、地の文の用語として意図的に用いられるからである。②′では、「お

はせずなどして」が、後続句の点線部「うちなきなどし（給へど）」と呼応的に用いられ、「（など）して」の「し」がサ変動詞としての働き（叙述性）をなしている。③では、先行句「得ず」を、「せずなど」が受け、この二つの打ち消し表現が、「して」で動作表現を付加されている。④も同じで、「……ず……などして」の呼応がなされている。これは、「……ず……ずして」と同じではあるが、「など」が介入することにより、前述した通り、「し（す）」が動詞としての本来の働きをしているからで、「ずして」の「し」の多分に形式化したのとは違いを認められよう。

6『賀茂保憲女集』序文の「ずして」―順接状態表現としての特質―

①されど人の心あはずして、をかしきことはすくなくして、うきことはおほかり、

②かいをばたもたずして、ことぶきをたもてるさまども、

③うぐひすのはぶきのはなをたたずして、くれゆくはるををしむ、

④ちぎれる月日をまちて、しのびのつまをとらずしてとしふれど、

⑤はかなきことたてたるはがにかかれるとり、ゑにうたれんことをしらずして、てるひとをかへり見みるさをしか、

⑥よをそむきたるほふしこそは、もののいのちをころさずして、このみをのみはこきくへ、

iからにしきおもしろしといへど、つひにたえでやはある、おもしろきさくら、つねにちらずは、ひとにいとはれなん、

(1)をかしきことはすくなくして、うきことはおほかり、（この例は前掲①の再掲出）

(2)されどもひとのしろとてあはれびは、めこなくして、せうようすとて、はるはねのびとて、のべにいでて、

1しもは、あさごとにおきまさる、しろたへの月見る人もなくて、むばたまのすみをおこして、かしらをつどへてものがたりをして、

2世中はじまりけるとき、むかしはにはたたきといふとりのまねをしてなむ、をとこ女はさだめけるに、草のたねなくておひけるは、このとりのをしへたりけるになんありける、

この家集の序は、『古今和歌集』とそれと類似するところがある。(1)(2)の「～くして」が順態接続の状態表現と解し得るのに対し、2の「～くて」は、〔（草ガ種ガナ）イノニ〕の意で、文脈上の逆態接続とも採れそうである。そして(1)は、①の「ずして」の順態接続〔ナイ状態デ〕とともに後続の「多かり」の状態表現と呼応している。また、②の「ずして」は、後続の「保てる」の存続表現と呼応する。更に、④の「ずして」は、後続の「年経れど」と呼応する。

③⑤⑥の「ずして」は、後続句と呼応は認められないが、順接状態表現と解し得る。

『古今仮名序』では、古注は除外したため「で」の例は無かったが、この序には一例存し、iの「たえでやはある」は、〔絶エズニハアロウカ〕の意で、「ずして」と明確に相違し、その直後でいったん切れる用法ではない。

7『栄花物語』の「ずして」―地の文への進出―

ここでは、「ずして」「で」の同じ巻で用いられたものを挙げ、二

つに意味差のあることを確認する。

①一条院には、御読経、御念仏など絶えずして、僧どもの、あはれに心細く広き所に人少なにおぼゆるままに、（九　いはかげ）

i（中宮）「なほこのこといかでさらでありにしがなとなん思ひはべる。（略）」（九　いはかげ）

②iいも寝られで明かさせたまひ、あはれに思しつづけらる。さて暁に出でたまひてすなはち、御文あり。

今朝はなどやがて寝暮らし起きずして起きては寝たく暮るるまを待つ

とあり。（十四　あさみどり）

iii宮の上はやがてこの御忌のほどに、尼になりなんと思しのたまへば、関白殿の上も、「ただ今さらでもありなん」と、制し申させたまふ。（十四　あさみどり）

③やがてそのわたりの村、一つの里となさせたまひて、水清う澄み、煙絶えずして、事の便を賜せてはぐくみかへりみさせたまふほどに、（十五　うたがひ）

④（道長）「（略）この火一たびに出でて、今日より後消えずして、わが末の世の人々同じく勤め、三昧のともしびを消たずかかげ継ぐべくは、この火一度にとく出づべし」と祈りて打たせたまひしに、（十五　うたがひ）

iv殿の御前、「いかで今はただ、祈りはせで、滅罪生善の法どもおこなはせ、念仏の声も絶えず聞かばや」とのたまはするを、（十五　うたがひ）

「ずして」四例の内訳は、地の文の①③の二例、歌の②の一例、会話（祈りの詞）の④の一例である。

右に挙例した通り同じ巻に「で」も用いられ、「ずして」との意味差のあることは、明らかである。

この物語では、『竹取物語』『うつほ物語』『源氏物語』等の作り物語と異なり、「ずして」を会話語として用いるという技法を捨て去っている。これは、次に挙げる鎌倉時代の作品に受け継がれている。

8『平家物語』の「ずして」と「で」

①楽みをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらず して、民間の愁る所をしらざ（ッ）しかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。（一・祇園精舎）

右の「……ず……ずして」の用法は、『古今仮名序』の①、『うつほ物語』の⑨のそれに同じ。

②（祇王母）「まことにわごぜのうらむるもことはりなり。さやうの事あるべしともしらずして、けうくんしてまいらせつる事の心うさよ。（略）」（一・祇王）

③（仏御前）「（略）女のはかなきこと、わが身を心にまかせずして、おしとゞめられまいらせし事、心ううこそさぶらひしか。（略）」（一・祇王）

④さばかりの砌に、束帯たゞしき老者が、もとゞりはな（ッ）てねり出たりければ、わかき公卿殿上人こらへずして、一同は（ッ）とわらひあへり。（三・公卿揃）

⑤「（略）」といふ朗詠をして、秘曲を引給へば、神明感応に堪へず

「ずして」の意味　――主として平安和文の用例を通しての分析――

して、宝殿大に震動す。（三・大臣流罪）

④⑤の「こらへずして」「堪へずして」は、『土左日記』の①の「たへずして」と類義、同語である。更には、『源氏物語』の②の「敢へずして」にも類似し、〔忍耐スル・シ遂ゲル〕の意を否定する場合には、状態表現が選ばれたことが分かる。

⑥（少将）「（略）成経彼嶋へながされて、露の命消やらずして、二とせををく（ツ）てめしかへさるゝうれしさは、さる事にて候へども（略）」（三・少将都帰）

⑦非参儀二位中将より大中納言を経ずして、大臣関白になり給ふ事、いまだ承り及ばず。（三・大臣流罪）

⑧海道宿々の遊君遊女ども「あないま〳〵し。打手の大将軍の矢ひとつだにもゐずして、にげのぼり給ふうたてしさよ。（略）」とわらひあへり。（五・五節之沙汰）

i（入道相国）「（略）見参するほどにては、いかでか声をも聞かであるべき。いまやう一つうたへかし」（一・祇王）

iの「聞かである（べき）」は、『保憲女集』のi「たえでやはある」と同じ用法である。「ある（あり）」が状態表現であり、従って「で」には「ずして」とは相違し、状態性の無いことを示すものである。

ii（祇王母）「（略）いまだ死期も来らぬおやに身をなげさせん事、五逆罪にやあらんずらむ。此世はかりのやどりなり。はぢてもはぢでも何ならず。唯ながき世のやみこそ心うけれ。（略）」（一・祇王）

iiの「はぢてもはぢでも」は、単純接続の「て」の否定表現が「で」であることを示すもの。

iii（後二条関白殿ハ）四十にだにみたせ給はで、大殿に先立まいらせ給ふこそ悲しけれ。（一・願立）

iiiの「みたせ給はで」は、〔達セラレナイノニ〕と解すれば逆接であるが、〔達セラレズ〕とも解される用法である。

iv大衆とり得奉るうれしさに、いやしき法師原にはあらで、や（ン）ごとなき修学者どもかきさゝげ奉り、おめきさけ（ン）でのぼりけるに、（二・一行阿闍梨此沙汰）

ivの「あらで」は『土左日記』のiiと同じ。

v（俊寛僧都）「（略）鹽干のときは貝をひろひ、あらめをとり、磯の苔に露の命をかけてこそ、けふまでもながらへたれ。さらでは浮世を渡るよすがをば、いかにしつらむとか思ふらむ。（略）」（三・有王）

vi又安元の比おひ、御方違の行幸有りしに、さらでだに鶏人暁唱こゑ、明王の眠ををどろかす程にもなりにしかば、（六・紅葉）

右の「さらで」は、「さ＋あらで」であり、次のviiの「ならで」は「に＋あらで」で、いずれも「あり」に無状態性の「で」が下接したものである。

vii（入道相国）「何条其御所ならでは、いづくへかわたらせ給べかんなる。其儀ならば武士どもまい（ツ）てさがし奉れ」（四・若宮出家）

9『宇治拾遺物語』の「ずして」と「で」

ここでは、同じ章段（話）に用いられた両者の例の比較をしてみる。それぞれ㊟に述べた通り、意味差を意識して使い分けられてい

る。

1わたりせむとする者、雲霞のごとし。おのおの物をとりてわたす。このけいとう坊「わたせ」といふに、聞きもいれで、こぎいづ。その時に、此山ぶし「いかに、かくは無下にはあるぞ」といへども、大かた耳にも聞きいれずして、こぎ出す。

（三六　山ぶし舟祈返事）

㊟「で」は否定の単純接続であるが、「ずして」は否定順接状態表現で、一種の強意表現にもなっている。

2別当、心をまどはして、仏の事をも、仏師をもしらで、さとむらに、手をわかちて、たづね求むる間、七八日をへぬ。（略）その後、此専当法師、やまひつきて、命終りぬ。妻子、かなしみ泣て、棺に入ながら、捨てずして置て、猶これをみるに、死て六日といふ日の未の時ばかりに、にはかに、此棺はたらく。

（四五　因幡の国別当地蔵作さす事）

㊟「ずして」は、〔（捨テ）ナイママニシテ〕の意であることにより、後続の語句の内容に即するものとなっている。

3薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。別当はしけれども、ことに寺の物もつかはで、極楽に生れんことをなん願ひける。年老、やまひして、しぬるきざみになりて、（略）弟子を呼びていふやう、「見るやうに、念仏は他念なく申てしぬれば、極楽のむかへ、いますらんと待たるゝに、極楽の迎へは見えずして、火の車を寄す。（略）」

（五五　薬師寺別当事）

㊟別当僧都の会話で用いられた「見えずして」は、待ちかねていた極楽の迎えが〔アラワレナイママニ〕と、僧都の気持ちをよく捉えた用語選択である。

4（翁）「（略）このことをせずして、心を世にそめて、さわがるゝ事は、きはめてはかなきことなり」といひて、返答も聞かでかへり行。（九〇　帽子児与孔子問答事）

㊟「返答も聞かで」は、〔返答モ聞カナイノニ〕の意に採れば逆接になるが、〔返答モ聞カズニ〕とも解される。

5夜の夢に、御帳より人の出でて、「このをのこ、前世の罪の報ひをばしらで、観音をかこち申して、かくて候こと、いとあやしき事なり。（略）まかりいでんに、なにもあれ、手にあたらん物をとりて、捨ずして、もちたれ。（略）」と、追るゝとみて、

（八六　長谷寺参籠男利生にあづかる事）

㊟「しらで」は、〔知ラナイノニ〕とも〔知ラナイデ〕とも解される。「捨ずして」は、〔捨テナイママデ〕と解すれば、後続句との意味のつながりがよい。

まとめと補説

「ずして」と「で」は、意味が相違する。「ずして」は、『古今仮名序』や『保憲女集』序文のような一種の論説文では、その順接状態表現という固定的・限定的な意味に留意してこれを用いている。『土左日記』においては、「堪ふ」に下接して用いている。これは、他の作品にも共通しており、「堪ふ」「敢ふ」等の表す動作に「ずして」がなじむものであったと考えられる。

『竹取物語』や『うつほ物語』の会話文に用いられることの多いのは、話し手と聞き手との間の伝達の的確さを期して、その意味の

固定的・限定的な面を捉えて用いたものである。『うつほ物語』の⑧の会話文の例に「すみやかに」が用いられているのも、現代語訳に示したようにその意味の限定的側面によったものである。

「ずして」は、和文の論説文・物語会話文のごとき表現主体（作者）の表現の次元から選び用いられたものと、他方、読解の次元から漢文訓読（訓点）に用いられたものとを、同一次元で捉えるべきではない。ただし、その意味性を重視して使われたものである点では共通性を持つ。

一方、「で」は単純接続の「て」の否定表現で、地の文・会話文にかかわりなく用いられる。

「ずして」「で」ともに、平安時代の日常的用語でもあったと推測されるが、平安時代の作り物語では作者による用語選択が、如上のような用法上の相違を結果したものである。平安時代末の歴史物語では、その相違は失われていく。そして鎌倉時代の『平家物語』『宇治拾遺物語』になると地の文・会話文の区別は失せて、意味の相違によって、用いられたものとなる。

従って位相の違う語が、無意図的・混淆的に使われたとは考え難い。

「ずして」と「で」、これに関連する「～くして」「～しくして」と「～くて」「～しくて」等を精査した先行論文も少なからず存するが、管見による限りこの違いを位相差として捉えているので、本稿では敢えて引用しなかった。

引用例テキスト『古今和歌集仮名序』『土左日記』『竹取物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』『平家物語』『宇治拾遺物語』…日本古典文学大系

『うつほ物語』…おうふう『賀茂保憲女集』序文…新編国歌大観

『栄花物語』…栄花物語本文と索引本文篇（漢字・仮名の表記、濁点・句読点等は、新編日本古典文学全集による）